

高等学校

平成 13 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

教 育 経 営

東京都教職員研修センター

教育研究員名簿（教育経営）

No.	学区	学 校 名	氏 名
1	1	都 立 城 南 高 等 学 校	宇 野 一 茂
2	2	都 立 深 沢 高 等 学 校	高 橋 和 久
3	2	都 立 新 宿 山 吹 高 等 学 校	佐 藤 俊 一
4	4	都 立 北 野 高 等 学 校	廣 末 修
5	5	都 立 日 本 橋 高 等 学 校	柏 倉 正 伸
6	5	都 立 忍 岡 高 等 学 校	外 川 裕 一
7	5	都 立 足 立 工 業 高 等 学 校	吉 田 裕 亮
8	7	都 立 第 二 商 業 高 等 学 校	加 藤 和 宏
9	8	都 立 砂 川 高 等 学 校	磯 部 篤
10	8	都 立 東 大 和 高 等 学 校	佐 藤 修
11	8	都 立 東 大 和 南 高 等 学 校	田 原 晃 夫
12	10	都 立 国 立 高 等 学 校	平 池 徳 見

担当 東京都教職員研修センター統括指導主事

石 井 杉 生

研究主題 開かれた学校づくりを通して、
特色ある都立高校を目指す学校運営の在り方

目 次

I	主題について	
1	主題設定の理由	2
2	研究内容	3
II	学校評価の結果を活かした特色化の方策	
1	はじめに	4
2	試行校の「学校評価」に関するアンケート調査	4
3	各学校の特色の維持・発展の方法や 今後の特色化の推進を図る方策の具体例	8
4	まとめ	9
III	特色ある教育課程の工夫	
1	はじめに	10
2	学校独自の取り組みによる特色	10
3	地域を取り込むことによる特色化	11
4	特色ある教育課程実践校の調査・分析	12
5	連携の具体化モデルプラン	12
6	まとめ	16
IV	学校の特色を効果的に伝える広報活動の工夫	
1	はじめに	17
2	中学生に対する広報活動	17
3	効果的な広報活動を行うための組織づくりの工夫	19
4	視覚的な手法を取り入れた広報活動の工夫	21
V	まとめと今後の課題	24

I 主題について

1 主題設定の理由

今日、学校教育においては、国際化や情報化の進展、少子高齢化などの社会的変化を背景として、地域や生徒の多様なニーズに対応して豊かな人間性をはぐくむとともに、生徒一人一人の個性を生かしてその能力を十分に伸ばす、新しい時代の教育のあり方が問われている。

このような背景の中、平成14年度から学校週5日制が完全実施され、平成15年度からは、高等学校において新学習指導要領が施行される。新学習指導要領では、「学校設定科目・学校設定教科」の設置、「総合的な学習の時間」の創設など、各学校が生徒や地域の実態などを踏まえ、創意工夫を生かして主体的に教育課程を編成し、特色ある教育活動を実施できる仕組みが整えられた。指導内容によっては、地域と連携し、学校外の専門家や地域住民など地域の人材や施設を活用して教育活動を実施することが大切となり、今まで以上に開かれた学校づくりを進めることが必要となった。

また、東京都は今年度より、学校の教育目標や運営方針、指導について、学校が保護者・地域関係者と協議し、その意見を学校運営に反映させるための場として学校運営連絡協議会を全校に設置することとした。また、年間を通した授業公開の実施など開かれた学校づくりを推進する仕組みを整えてきた。さらに、平成15年度より入学者選抜において学区が撤廃され、中学生は全都から入学したい学校を選択できることになった。このような状況の中、都立高校が中学生や保護者から選ばれるためには、都立学校は開かれた学校づくりを一層推進するとともに、学校運営の方法を見直し、生徒にとって魅力のある特色をつくり出し、その特色を効果的に知らせることが今まで以上に必要となる。

しかし、学校が学校運営連絡協議会での意見や評価をどのように教育活動に反映させ学校の個性化、特色化を進めていくかは、各学校で現在検討中であろう。また、新学習指導要領の趣旨を生かして特色ある教育課程をいかに工夫するかについても、今後一層の改善が求められる。さらに、広報活動は、学校によってその方法がさまざまであり、効果的に行われているとは言い難い。学校が保護者、地域のニーズに応えると同時に地域と連携した学校づくりを行うためには、学校や生徒の現状や学校の特色について保護者や地域に知らせる方法を考える必要がある。

このため、今年度は、「開かれた学校づくりを通して、特色ある都立高校を目指す学校運営のあり方」を研究主題として設定し、3つの分科会に分かれ、

(1) 学校評価の結果を活かした特色化の方策

(2) 特色ある教育課程の工夫

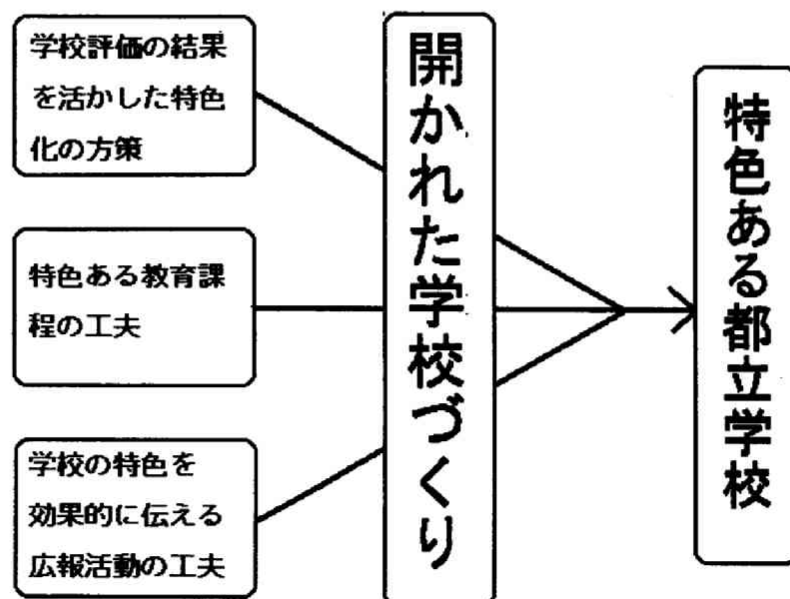
(3) 学校の特色を効果的に伝える広報活動の工夫

のテーマで研究を行った。

なお、本部会では、学校が共通理解のもとに、日常の教育活動において力を入れて取り組み、教員・生徒・保護者・地域に認知されるレベルに現れたその学校の肯定的な状態をその学校の特色と、また、そこに至る過程の状態を特色化と定義した。

2 研究内容

研究主題「開かれた学校づくりを通して、特色ある都立学校を目指す学校運営の在り方」のもと、三つのテーマの関係を下図のように想定し、それぞれの視点から検討した。



(1) 学校評価の結果を活かした特色化の方策

学校評価は、生徒や保護者のニーズが示される点で、個性化・特色化を推進するための大きな手掛かりになる。学校の現状を把握し、内部および外部からの声を慎重に分析・検討することにより、特色ある学校づくりへの方策に結びつけていくことが可能となる。そこで、学校運営連絡協議会試行校に対し学校評価に関するアンケートを実施し、学校評価を活用した学校の個性化・特色化の可能性について検討した。また、今年度から学校運営連絡協議会を実施している全都立高校に参考となるよう、試行校における学校改善の取り組み例を整理し、まとめた。

(2) 特色ある教育課程の工夫

開かれた学校づくりが推進されてきている現在、学校教育の根幹である教育課程の在り方が学校選択に直結されてくるであろう。生徒の興味・関心や適性等に対応した、特色ある教育課程の編成・工夫が一層必要となってくる。そこで、教育課程を中心に各学校の特色化を点検できるチェック表を作成するとともに、まず自校のみで可能な特色化、次に幅広い連携によって可能となる特色化の両面から、どのような実践が可能か考察した。

(3) 学校の特色を効果的に伝える広報活動の工夫

開かれた学校づくりが進められる中で、家庭・地域・社会に向けて、各学校の特色を効果的に伝える広報活動が求められている。そこで、広報活動がどのように効果を発揮したか、在校生や広報担当者に対するアンケート調査から分析した。そして効果的な広報活動を行うための、校内の組織づくりの工夫を示すとともに、視覚的な手法を取り入れた広報活動の方法について検討した。

Ⅱ 学校評価の結果を活かした特色化の方策

1 はじめに

今日、社会の成熟化に伴い生徒の価値観が多様化している。東京都教育委員会は、平成7年度に「都立高校白書」において、個性化・特色化の推進を掲げ、平成9・11年度には「都立高校改革推進計画」を作成し、柔軟で多様な高校教育の展開のための方策を示している。それぞれの都立高校は「特色ある学校づくり」に向けて、日々の実践を重ねているが、その成果が目に見える形となって表れてきている例はまだ多いとはいえない。

このような状況のなか、平成13年度から全都立高校に学校運営連絡協議会が設置された。学校の教育内容を保護者や地域に示して理解と協力を得るとともに、学校評価を通して学校に対する要望や意見を学校運営に反映させるしくみが整えられた。この制度は、学校の特色化への大きな後押しと考えられる。

学校評価については、教育庁指導部から「東京都公立学校学校評価基準」(平成7年2月)が刊行されている。このなかでは基本的な考え方として、「組織体としての学校が、学校としての教育機能をどの程度果たしているかを総合的客観的に評価し、その結果に基づいて教育活動全般についての改善策を立て、各学校における教育活動の充実、向上を図ること」と示されている。そして、基準の作成にあたっては、「学校の個性化、特色化に対する評価ができるようにする」という基本方針がある。

そこで、本分科会は小主題を「学校評価の結果を活かした特色化の方策」と設定して、平成11・12年度学校運営連絡協議会試行校にアンケート調査を行い、学校評価の結果とその結果への対応、結果を活かした特色化の方策について研究を進めた。学校評価の結果を、教員と生徒、保護者の三者が高く評価した項目はその学校の特色と見なし、教員と生徒の評価が大きく食い違う項目を、これまでの取組みと今後の対応によって特色となりうる特色化の過程の段階と考え、アンケート結果を分析し考察した。

2 試行校の「学校評価」に関するアンケート調査

(1) アンケート対象校

平成11年度からの学校運営連絡協議会試行校27校および平成12年度「学校運営連絡協議会試行校報告書」(平成13年3月)を基に、12年度試行校の中で教員・生徒・保護者の三者に学校評価を実施した23校の合計50校

(2) アンケートでの調査項目

(ア) 自校の学校評価において、教員と生徒(一部保護者を含む)の評価が下の①～④に最も当てはまるのは、「学校運営」「教科指導」「生活指導」「進路指導」「健康安全・施設設備」「特別活動」「部活動」「その他」の8項目のうちのどれか(「学校運営連絡協議会による学校評価」を参照した。)

①教員・生徒(保護者を含む)の評価が最も高い項目

②教員・生徒の評価が最も低い項目

③教員の評価が高く生徒の評価が低い項目

④教員の評価が低く生徒の評価が高い項目

(イ) 評価結果に対する学校の対応を具体的に記述する。

(3) アンケート結果の分析と考察

平成11年度からの学校運営連絡協議会試行校27校中21校、12年度試行校23校中20校、合計41校から回答を得た。

次の表は、前述2-(2)-(ア)の質問①～④に当てはまる項目を選んだ学校の数
を全回答校数を100とした百分率で表したものである。さらに、設問に対する教員と
生徒の回答率から特色化への傾向を顕著な例を中心として分析した。また、次頁以降の
①～④のグラフは前述2-(2)-(ア)について項目別の回答率をグラフ化したもの
である。

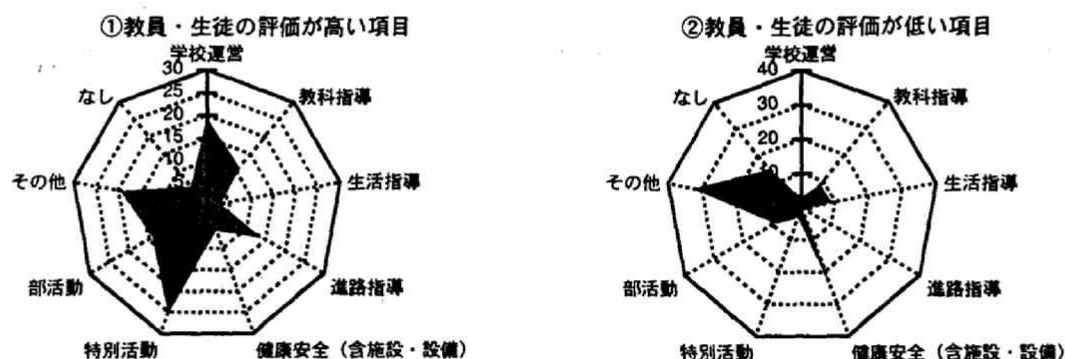
	パターン(1)	パターン(2)	パターン(3)	パターン(4)
教員の回答	○ 肯定的回答	● 否定的回答	○ 肯定的回答	● 否定的回答
生徒の回答	○ 肯定的回答	● 否定的回答	● 否定的回答	○ 肯定的回答
学 校 運 営	19.4%	2.9%	5.9%	6.3%
教 科 指 導	11.1%	8.8%	41.2%	3.1%
生 活 指 導	2.8%	8.8%	17.6%	3.1%
進 路 指 導	13.9%	0%	5.9%	3.1%
健康安全施設設備	5.6%	23.5%	11.8%	12.5%
特 別 活 動	25.0%	2.9%	2.9%	3.1%
部 活 動	13.9%	8.8%	5.9%	3.1%
そ の 他	19.4%	32.4%	2.9%	6.3%
合 計	94.4%	85.3%	85.3%	40.6%
な し	5.6%	14.7%	14.7%	59.4%

はじめに、全体の傾向を見る。約95%の学校では、教員と生徒ともに評価する学校の
の特色があることがわかる(パターン(1))。一方約85%の学校に教員と生徒とも
に否定的な学校評価の項目があることがわかる(パターン(2))。また、教員は評価
しているが、生徒は評価していない項目のある学校が約85%あり(パターン(3))、
生徒が評価しているが、教員が評価していない項目がある学校は半分に満たない(パタ
ーン(4))。さらに、パターン(1)は項目が比較的数値が分散しているが、パター
ン(2)、(3)は一つの項目が高い数値を示している。また、健康安全施設設備の項
目については、評価が分かれる傾向にある。次に、パターン別に結果を分析し考察する。

① 教員と生徒の両者が学校に対して肯定的な回答をした項目(パターン(1))

両者が肯定的に捉えているということは、学校全体にその項目を自校の「特色である」、
あるいは「特色としていこう」という認識が流れ、今まで以上に引き伸ばしていくこと
により特色化を推し進める姿勢があるということがいえる。具体的には、「特別活動」
が高い回答率を得ており、学校行事に代表される全校的な取り組みが功を奏している学
校の多さを表している。学校行事を通じて、教員は生徒の主体性を育もうと考え、生徒

は自己の存在意義や連帯感を見い出している。学校行事に力を注いでいくということはその学校の特色にはなりうる。しかし、東京都全体の中の一校となると、内容の充実による特色化が図られないならば、果たして他校とは違う特色を明確に打ち出すことができるかどうかは疑問ではある。また、学校週5日制の完全実施が目前の現在、これまでの学校行事を精選・重点化して、その学校ならではの行事を確立していくことによる特色化が一層重要になっている。



② 教員と生徒の両者が学校に対して否定的な回答をした項目（パターン（2））

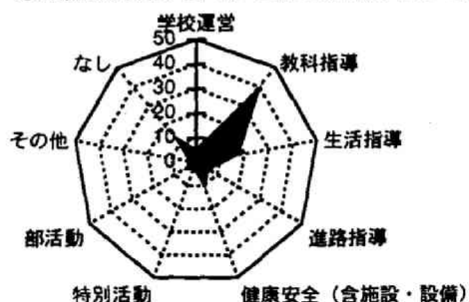
両者が否定的に捉えているということは、その学校が抱える重大な改善が必要となる項目といえる。特色とは、肯定的に捉えられている項目のみに限らない。現在は否定的な回答が多い項目も、今後、力点をおき改善の方向へ努力していくことで、その学校の代名詞的な特色になる可能性を秘めている場合もある。

まず、「健康安全・施設設備」に関しては、「冷房を設置して欲しい」など健康安全の指導に関する不満より、施設設備に関する不満の方が多い。施設に関しては多額の費用が必要であり、学校が独自で改善することは容易でない。しかし、設備に関しては、学校として改善を総合的に検討していく必要があるのではないかと。例えば、進路指導室の充実、相談室の設置等、校長の経営方針の基に予算を重点的に配分することにより、施設の工夫改善をすることは十分可能であろう。また、現有の施設設備の活用度についても各学校は検討する必要がある。

健康安全の指導についても、各高校は避難訓練・防災講話・交通安全指導などを実施しているが、今後は、「保健」や「家庭科」などの教科指導と連携しながら、薬物乱用防止指導・ネット犯罪・迷惑メール対策・悪徳キャッチセールス等、時代に対応し生徒の要求に応えた健康安全指導の充実が必要である。なお、「その他」の内容としては、教育相談の充実を希望する意見が3件あった。

③ 教員が肯定的であり、生徒が否定的な回答をした項目（パターン（3））

③教員の評価が高く、生徒の評価が低い項目



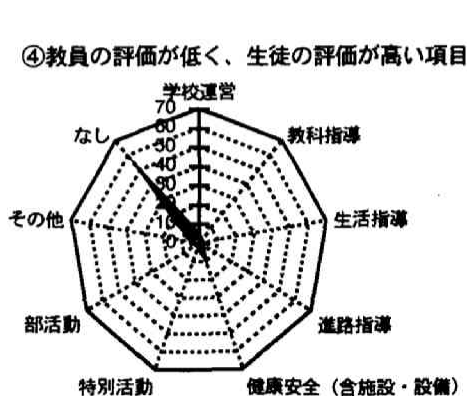
教員が肯定的に捉えているのに対し生徒が否定的に捉えているということは、両者の認識がずれているといえる。具体的には、「教科指導」に顕著に表れている。教員は自己の指導を肯定的に捉えているが、生徒はそのあり方に不平や不満を抱いている。

生徒の回答に注目すると、「教科指導」では、肯定的回答のパターン(1)とパターン(4)を加えると、14.2%になる。それに対して、否定的回答

のパターン(2)とパターン(3)を加えると50.0%になる。つまり「教科指導」に関しては、満足している生徒は十数パーセントであるのに対して、半分の生徒が現状の教科指導に満足していないことが読み取れる。一方、「教科指導」の教員の回答では、半分以上の教員は自分の学校は教科指導を熱心に行っていると考えており、自校の教科指導に不満足な教員は、10パーセント強にすぎない。学校の教育活動の根幹である教科指導に関して教員と生徒の満足度が大きく離れていることは、重大な問題である。しかも、教員の多くは、生徒が不満足であることに自覚がない。このことは、このまま放置できない状態である。全教員が生徒理解に努め、生徒の実態を分析し、「分かった・できた・もっと知りたい」という生徒の強い学習意欲に対して、これまでの経験的・感覚的な指導を改め、生徒の要望に応えられるようなきめ細かい指導を徹底していくことが大切である。生徒の学習意欲に合わせた教科指導が、やがて学校の個性化や特色化につながっていく。生徒の否定的回答は教科指導に対する生徒の要求の裏返しの表現と捉えられる。「しっかりした授業をして欲しい、学力をつけて欲しい」と熱望する生徒は教員の予想以上に多いと考えなければならないし、この要望は活かされなければならない。現時点での学校としての努力の結果が、すぐに望ましい形として明確に表れていなくても、継続的かつ着実な対応が特色化の契機となりうる。例えば、教科指導に対する生徒の意見や要望を定期考査ごとに募ったり、実力テストの結果をクラス間や前年度の学年と比較して推移を確認することなどにより、定期的に生徒の状況を把握し、教科会や学年会で適切な指導内容・方法を検討し、教務部が中心になって学校の重点目標化していくというような方策が考えられる。「教科指導」の充実、これからの都立高校の生き残りをかけた重点な項目である。

第2位は「生活指導」である。「生活指導」に関して生徒の約25パーセント以上が不満に思っているのに対して、満足している生徒は6パーセント弱である。逆に教員の20パーセントが満足し12パーセントが課題であると考えている。生徒の不満が、指導が厳しすぎることに對するものか、緩やかすぎることに對するものか、このアンケートからは明確にはでない。一方、教員の課題意識は、基本的な生活習慣の確立を図るための生活指導の充実の必要性を認めている。教員が一丸となった「生活指導」の充実・特色化は、高校生、保護者・地域、広い意味で都民からの都立高校への信頼を回復する大きな手立てであり、教科指導に比べても地域に認知される可能性が高い項目である。

④ 教員が否定的であり、生徒が肯定的な回答をした項目（パターン（4））



この項目も、③と同様に生徒と教員の認識がずれていると考えられる。ここでは、約60パーセントの学校が該当する項目がなし、としている。つまり、教員の予想を超えて生徒がよいと評価している項目は、残念ながら特にないということになる。第2位は「健康安全・施設設備」の項目で12パーセント強であるが、ここでも、健康安全に比べて施設設備に関する評価が多い。最近改築された都立高校には、施設や設備の点で他校に誇れるものもあり、この点が教員の予想を超えて生徒の評価を得たものと思わ

れる。

3 各学校の特色の維持・発展の方法や今後の特色化の推進を図る方策の具体例

試行校がもつ特色や特色化を推進するための現在の取組みの具体例を、アンケート（評価結果に対する学校の対応）の回答をもとに一部の学校には聞き取り調査を行い、項目別にまとめて以下に示す。

*教科指導

【校内における授業公開】

教員が互いに授業を見せ合うことで、生徒は授業への緊張感が高まり、教員にも改めて指導内容・方法など検討する契機となった。定期的な教科会の実施は、授業に関して生徒の要望に応え、不満を解消するための有効な研修となっている。

【共通の進度・テスト・評価】

教員による指導内容の違いをなくす目的で、数学科と英語科が、定期的に教科会をもち検討を重ねながら、共通の進度・テスト・評価を実施している。

【小テスト】

基礎学力の定着を目指し、朝のホームルームで英単語・漢字・計算テストを学年の協力を得て教科が中心になって実施している。また、毎回の授業の始めに実施することで、生徒の授業への集中度を高めている。

*生活指導

【遅刻のない学校】

毎学期に遅刻が10回以上の生徒が20%を越えていたことへの対策として、学年が中心となって、遅刻が3回になった生徒に、始業10分前登校するよう指導したり、なぜ遅刻するかを考えさせる指導を行った。その結果、遅刻者は3%までに激減し、遅刻のない学校が維持されるようになった。

*進路指導

【進路遠足】

進路の情報提供の一環として、3年生が5月の遠足に大学・短大・専門学校・公官庁・民間企業へ、1班3人以上で3箇所を見学に行く「進路遠足」を、3学年と進路部が中心になって実施した。実施前は遠足の内容に不満をもっていた生徒も、実施後はその内容に満足した。これを機会に、夏休みなどに生徒が自分から学校説明会などに積極的に参加するようになり、生徒の進路希望実現のための意欲が大いに高まった。

【オープンキャンパス】

進路指導に対する教員と生徒との認識の違いが明確になった。そこで、進路部と3学年が中心に、卒業生が多数進学している近隣の大学・短大に、本校生徒のためだけの学校説明会の開催を依頼し、2・3年生の希望者が夏休み中に参加した。実際に見学に行った生徒は、学校の施設・設備や授業内容、普段の学生の姿を目にして、好印象を受けたなどの感想をもって帰ってきた。進路意識の高揚に大きな効果があった。

***健康・安全（含施設・設備）**

【美化活動】

1・2学期に各1回、ロングホームルームの時間に保健部が「美化の日」を企画し、全校一斉清掃を実施している。始業式・終業式・高校入試前を合わせて、一斉清掃の回数は年間10回になる。日常の清掃活動にも全教員が立ち会い、さらに美化委員が清掃状況を点検するなどの活動を通して、きれいな学校として定評がある。

【フィールドワーク】

近隣の畑を借りて、1年生がサツマイモを育てる勤労体験学習を、開校以来継続している。畝づくり・苗植え・除草・収穫・会食という一連の共同作業を通して、生徒間の交流を深める機会ともなっている。

***特別活動**

【縦割り】

クラス単位の対抗形式で実施している合唱祭の活性化とレベルアップを図るために、合唱祭前のロングホームルームの時間を生徒部提案で「縦割り練習」の時間に指定して実施している。3年生が1・2年生を指導し、互いに批評しあうことで、「縦割り練習」時間前後に、各クラスの練習に一層熱が入り、合唱祭の盛り上がり大きな効果があった。体育祭でも、「縦割りクラス」による応援合戦が、大きな特色の一つになっている。

【優先時間帯】

合唱祭や文化祭の練習・準備時間を確保するために、放課後に30分間の練習のための時間帯を部活動等に優先して設け、内容の充実を図っている。

4 まとめ

今回のアンケート回答校41校の全体的傾向として、各試行校の特色が比較的多様化していること、多くの教員・生徒は自分の学校に肯定的に評価する項目があるとしていることが分かった。また、項目別では特別活動に対する評価が高い一方で、教科指導に対する評価が際だって低いことも浮き彫りになった。教員の自覚と改善に向けた取り組みが必要であることも分かった。以上のように、学校運営連絡協議会による学校評価は、学校の現状を把握し学校がもつ特色を維持・発展させるとともに、改善点を見極め特色化を図る上で、極めて有効な手段のひとつである。

学校の特色や特色化の過程がさらに明確になるような学校評価の内容・方法の検討と、他校で実施していない、できていない内容を充実・発展させて行くことを含めて、学校評価の結果を踏まえた具体的な特色化の方策についてのなお一層の研究が今後の課題である。その意味で、項目別の特色・特色化の具体例は参考になると思われる。

全ての学校が、生徒からは「この学校に入ってよかった」と言われ、地域からは「あの学校はこの町の誇りだ」と言われるような、信頼され期待に応える、特色をもった都立高校にならなければならない。各学校が学校評価の結果を、教育目標に照らし合わせて日常の教育活動を振り返り、教員全体の共通理解をもって、生徒や保護者・地域が共感できる内容のある特色づくりに最大限有効に活用することを期待する。

Ⅲ 特色ある教育課程の工夫

1 はじめに

情報化・少子高齢化などの社会情勢の変化、生徒・保護者・地域社会のニーズの多様化を受けて、都立高校も大きく変化することを求められている。平成15年度より実施される新学習指導要領や東京都の都立高校改革推進計画第二次実施計画などでは、学校に求められる教育課題として、「地域に開かれた学校運営の推進」や「特色ある教育活動の展開」が挙げられている。また、入学者選抜における学区の撤廃は、これらの変化を大きく加速させると予想される。明確な個性や特色を打ち出しにくい普通科高校においては、自らの存在意義を明らかにしていくことが急務の課題となる。そこで本分科会では、主として全日制普通科高校を念頭におき、「学校独自の取り組みによる特色化」、「地域を取り込むことによる特色化」の二点にわたって都立高校の個性化・特色化の推進状況を点検するためのチェックシートを作成し、さらに、地域等の連携を図った学校設定教科科目の実践事例を作成した。

2 学校独自の取り組みによる特色化

学校独自の取り組みによる特色化・チェックシート					
項 目	到 達 度				
(視点)教育目標・指導方針の具体化に積極的か					
① 教育目標に基づいて教育課程を編成しているか	5	4	3	2	1
② 各教科毎に目標が設定され公開されているか	5	4	3	2	1
③ 各教科の目標と成果が評価される仕組みがあるか	5	4	3	2	1
④ シラバスの作成・公開が行われているか	5	4	3	2	1
⑤ 評価結果を反映させる仕組みがあるか	5	4	3	2	1
⑥ 教育目標を実現する視点から学校行事は検討されているか	5	4	3	2	1
⑦ 自校に適した学期制を検討したか。	5	4	3	2	1
(視点)入学者選抜方法の改善に積極的か					
① 学校の特色を踏まえた推薦基準を設けているか	5	4	3	2	1
② 推薦基準の理解度を中学校等に点検しているか	5	4	3	2	1
③ 面接を始めとする選抜方法に学校独自の工夫があるか	5	4	3	2	1
④ 男女枠・傾斜配点等の選抜基準に工夫があるか	5	4	3	2	1
(視点)生徒の多様な学力に応じた教育活動を行っているか					
① 少人数制、習熟度別の講座展開などを活用しているか	5	4	3	2	1
② IT、ティ・チング・アシスタント(TA)などを活用しているか	5	4	3	2	1
③ PC室・視聴覚室などの学校施設設備が有効に活用されているか	5	4	3	2	1
④ モジュール授業等の1単位時間の工夫を行っているか	5	4	3	2	1
⑤ 授業改善を積極的に行っているか	5	4	3	2	1
⑥ 補習授業などが適宜行われているか	5	4	3	2	1
⑦ 進路別の選択教科が十分に用意されているか	5	4	3	2	1
⑧ 進路・学習計画のためのガイダンス機能の充実を図っているか	5	4	3	2	1
⑨ 卒業生の進路体験談等を活用しているか	5	4	3	2	1
(視点)特色ある教科・科目を設定しているか					
① 各教科間の連携による学際的な講座があるか	5	4	3	2	1
② 学校の教育目標を実現するための学校設定教科・科目があるか	5	4	3	2	1
③ 新しい教科・科目の設定に対して柔軟に対応できるか	5	4	3	2	1
(視点)生徒の視点に立った特色化を行っているか					
① 選択教科等の設定に対して生徒の要望が反映されるか	5	4	3	2	1
② 個々の授業に対して生徒による評価の要望が反映されるか	5	4	3	2	1
③ 学校行事の運営に生徒が主体的に関わっているか	5	4	3	2	1
④ 生徒会は活発に活動しているか	5	4	3	2	1

(凡例) 5－実施中、4－一部実施中、3－検討中、2－話題になったことがある、1－全く話題に上っていない

ここに述べたのは、各校が単独で実施しうる方策をチェックシートの形でまとめたものである。個々の方策は格別特色のあるものではないが、これらの積み重ねが各校の特色として認知されることとなる。したがって、長期的な視野に立ってどの項目をどの程度実施していくかを検討していくことが、各学校が特色化を進める上で大切である。

3 地域を取り込む事による特色化

学校独自の取組みには自ずと制限がある。地域を取り込む、より広い連携が必要となる局面も出てくる。ここで、「地域」とは、最も広い意味でとらえたものであり、その学校の属する地域(場合によっては都内全域)の人材・施設のすべてを含んで考えた。

地域を取り込むことによる特色化・チェックシート					
項 目		到達度			
(視点) 地域と人材の交流を推進しているか					
① 公開講座などの生涯学習機能を積極的に行っているか		5	4	3	2 1
② 一般市民と生徒とが共に学ぶ機会があるか		5	4	3	2 1
③ 中学校への出前授業を行っているか		5	4	3	2 1
④ 大学・専門学校からの出前授業を受け入れているか		5	4	3	2 1
⑤ 市民講師の制度を活用しているか		5	4	3	2 1
⑥ 地域調査など地域と連携、共働する活動を行っているか		5	4	3	2 1
⑦ 地域の行事に参加しているか		5	4	3	2 1
⑧ 学校行事に地域の住民を招待しているか		5	4	3	2 1
(視点) 地域と施設の連携を推進しているか					
① 施設開放に積極的か		5	4	3	2 1
② 役所・郷土資料館など地域の施設を活用しているか		5	4	3	2 1
③ 学校施設(体育・文化)の有効活用を図っているか		5	4	3	2 1
④ 学校間の連携を図っているか		5	4	3	2 1
⑤ 社会福祉体験等で病院との連携を検討しているか		5	4	3	2 1
(視点) 生徒の地域における活動を評価しているか					
① 学校外の学修に対する単位認定制度の活用に対して積極的か		5	4	3	2 1
② 部活動以外の実績に対しても評価する仕組みがあるか		5	4	3	2 1
③ ボランティアなどで地域の活性化に社会貢献しているか		5	4	3	2 1
④ インターンシップを行っているか		5	4	3	2 1
(視点) 地域の学校評価を迅速に取り入れる意欲があるか					
① 学校評価を検討し、改善を提言する意欲があるか		5	4	3	2 1
② 改善項目を周知する努力を行っているか		5	4	3	2 1
③ 改善後の成果について再評価する仕組みを整えているか		5	4	3	2 1
(視点) 地域に学校を正しく伝えているか					
① 広報に関する委員会が明確か		5	4	3	2 1
② 学校案内の作成、配布に多くの教員が関わっているか		5	4	3	2 1
③ ホームページを学校の責任において作成しているか		5	4	3	2 1
④ 学校説明会・体験入学等の内容や広報に独自の工夫をしているか		5	4	3	2 1

(凡例) 5－実施中、4－一部実施中、3－検討中、2－話題になったことがある、1－全く話題に上っていない

(1) 連携の意義

地域との連携は、都立高校の個性化・特色化にむけて、以下の意義をもつと考えられる。

- ① 都立高校のネットワークを生かすことができる。
- ② より広く人材や施設の利用が可能であり、学習の幅が広がる。
- ③ 学校と生徒が地域において、一定の理解と評価を得ることにより、生徒の成長が望め、

結果として学校の評価の確立に結びつくこととなる。

- ④ 公開講座、地域調査などを通して、学校が地域の情報発信基地としての役割を担うことが可能となる。そのことで、地域とのより深い結びつきが実現する。

(2) 連携により可能となること

- ① 学校間連携の枠を拡大し、教員同士の交流を図る。他校に出向き、普通科高校で商業・工業の講義を行えるようにする。現状ではいくつかの問題があるようであるが、検討の必要はあろう。
- ② 地域理解を通して、地域の伝統や産業を学び、地域の人材を活用できる。また、埋もれていた伝統芸能を発掘・復元して、地域に還元するなどの視点も重要である。
- これらの具体的な取り組みをまとめたものが、このチェックシートである。

4 特色ある教育課程実践校の調査・分析

平成13年度「学校経営に関する資料」に基づき、今年度、学校間連携、学校外の学修の単位認定などを行っている全日制普通科高校の19校にアンケートを実施し、12校から回答をいただいた。以下はそのまとめである。

(1) 現在導入している教育課程(複数回答)

学校間連携による単位認定	ボランティア	インターシップ	検定による単位認定
5 校	3 校	2 校	6 校

(2) 導入の動機

- ① 生徒の実情から
② 進路指導の観点から

(3) 導入に際しての校内の意見

- ① 特に異論なく決定した。 6 校
② いくつかの異論があったが話し合い等で解決した。 5 校

(4) 成果

- ① 生徒の学習意欲が高まった。
② 学校全体により刺激となり、教育活動が活性化した。
③ 教員の意識改革がみられた。

(5) 課題

- ① 関連機関等との連絡調整の時間が長時間必要である。
② 実施時期の設定をどうするかが

(6) まとめ

連携などの試みは実数としてはまだ多くはないが、生徒の意欲を高めるなどの必要がある場合、より積極的に試みられるべきものとする。実施校のアンケートからも、実施に向けた障壁は低く、特に異論なく決定される方向にあることがわかる。

5 連携の具体化・モデルプラン

積極的に連携などを考える場合、どのようなことが可能かを考察したのが以下のモデルプラン

ンである。ここで想定している学校は、多様な進路を抱えている全日制普通科校とする。以下に示すモデルは、1単位35時間を基本に構成し、1年間型・2年間型・短期集中型等、いずれのケースにも適用できる学校設定科目とし、生徒の実態に応じて1学年から3学年のいずれにおいても実施可能なように配慮した。ここでは「国際理解」「地域研究」等の観点から5つの具体的なモデルプランを示した。

- [A] ・テーマ 「地域連携による課題学習（国際理解）」
 ・モデル地域 都心の各国大使館や国際機関等の施設を有している地域。
 ・目的 地域の特性を生かし、国際的な視野を育成する教育活動を行う。

時間	内 容	連 携（教科・地域）	留 意 点 及 び 評 価
2	ガイダンス		国際理解の必要性
4	学習内容の選択 (例) ①国・地域 ②文化・宗教 ③国際ボランティア	政治経済・地理・世界史 ・外国語・家庭科など	自らの学習の課題と目的を明確化させる。将来の自己実現への展望について理解させる。
5	ワークショップ① 各国・地域の特色の研究Ⅰ (風土・気候・文化・習慣)	各国大使館・図書館など (各教科との連携)	習慣等の違いによる失礼が無いよう十分に注意させる。特に、人種等による差別などの問題には留意させる。
5	ワークショップ② 各国・地域の特色の研究Ⅱ (政治・経済・宗教)	各国大使館・外務省 図書館など (各教科との連携)	学習内容・方向性を確認する。
5	ワークショップ③ 我が国との交流と国際援助の必要性	各国大使館・外務省 NGO (各教科との連携)	実際に行われている援助内容の考察や、今後可能な援助の内容等を考察させる。
5	ワークショップ④ 平和学習	国連大学・各国大使館・ 外務省など	人間としての真の平和と国際協力について学習させる。
3	発表準備 (文化祭及び研究発表会)		プレゼンテーションの準備
3	研究発表	各協力団体の招待	学習した内容・感想が的確に発表できたかを評価する。
3	事後指導及びまとめ		学習した内容が自己の可能性や進路計画に役立てることができたかを評価する。

- [B] ・テーマ 「地域連携による課題学習（地域研究）」
 ・モデル地域 河川の多い下町や里山の自然が残る郊外の地域
 ・目的 地域の歴史を知り、環境を主体とした現状について理解を深める。

時間	内 容	連 携（地域）	留 意 点 及 び 評 価
1	授業ガイダンス		授業の内容を説明するとともに、SGEを用いて自己紹介を行い、他者理解を図る。
2	地域の歴史	保護者や郷土史研究家等。地理歴史科・公民科	郷土の歴史について知る。
2	地域の産業		郷土の産業に付いての理解を深める。

2	フィールドワークのテーマ決定		いままでの講義からテーマを考え決定する。
4	フィールドワーク	地域住民、郷土博物館など	実際にフィールドワークを行う。
4	フィールドワークの発表		フィールドワークの発表を行う。他の生徒と情報を分かち合う。
2	地域の環境について	理科（生物）	地域の環境について理解できたか。
2	地域の自然について	地域住民など	地域で自然保護などの活動をしている方から実際に話を伺い、地域の自然について理解する。
2	フィールドワークのテーマ決め		いままでの講義からテーマを考え、決定する。
4	フィールドワーク	地域住民、郷土博物館など	実際にフィールドワークを行う。
4	フィールドワークの発表		フィールドワークの発表を行う。他の生徒と情報を分かち合う。
3	地域への提言のまとめ		いままでの授業を通じて、地域の問題点を出し、改善策を話し合う。
2	提言の発表	地域住民、行政	改善策を発表し、地域住民や行政の方から講評をいただく。
1	まとめ		

- [C] ・テーマ 「地域理解（文化と商業）」
 ・モデル地域 都内全域
 ・目的 地域の伝統芸能や産業について理解を深め、地域に貢献する姿勢を育てる。

時間	内 容	連 携（地域）	評 価 及 び 留 意 点
2	ガイダンス		地域の文化や地場産業を理解する。
2	地域の歴史と名物を知る	地域史に詳しい住民	
5	ワークショップ① 「私のお勧め品！、 〇〇でしか売られていない商品」 ・導入 ・フィールドワーク・調査 ・資料整理とまとめ	地域の商店街など	地域独特の商品の歴史や製造過程などについて理解する。 ・商品名 ・好きな理由 ・店名
5	ワークショップ② 「教えたい！〇〇の名店」 ・導入 ・フィールドワーク・調査 ・資料整理とまとめ	地域の商店街など	〇〇で評判のよく行く店（レストラン、理髪店、民芸店など）の発見 ・店名 ・好きな理由 ・住所・場所
5	ワークショップ③ 「残していきたい！〇〇の風景」 ・導入 ・フィールドワーク・調査 ・資料整理とまとめ	地域の商店街・役所など	私たちの好きな〇〇の風景の発見 ・どこから見たどの風景 ・好きな理由 ・時期・季節

5	ワークショップ④ 「この街が好き！〇〇の芸能・イベント・祭」 ・導入 ・フィールドワーク・調査 ・資料整理とまとめ	地域の商店街・役所など	私たちの好きな〇〇の祭り・イベント(市民オーケストラ、劇団など) ・活動団体・イベント名称 ・好きな理由 ・時期・季節
5	発表準備		プレゼンテーションの準備をする。
4	体験・研究発表、または文化祭への参加・発表	保護者・役所・地域住民など	学んだことや体験談、感想などが的確に発表することができたか、体験や学びが自己可能性や進路計画に役立ることができたか、また地域への社会貢献ができたか。
2	事後指導とまとめ		

[D] ・テーマ 「生き方ガイダンス」

・モデル地域 都内全域

・目 的 自分の将来、進路について確固たる目的意識をもつようにする。

時間	内 容	連 携 (地域)	留 意 点 及 び 評 価
1	自己理解に関する授業ガイダンス		授業の内容を説明するとともに、SGEを用いて自己紹介を行い、他者理解を図る。
6	仕事調べ	保護者など	どのような職業があるのかを調べ発表する。
2	自分の長所探し		自分の長所を自ら確認し自己肯定感を高める。
2	エゴグラムによる自己理解		エゴグラムを作成することにより自己理解を深める。
2	分析法による進路探索		自分の進路について調べる。
1	就業体験ガイダンス		進路探索により、自分の興味・関心と合致した職業を体験する。
16	就業体験	近隣の企業	自ら進んで体験できたかどうか。
2	就業体験発表会		他の生徒の体験を、静かに聴くことができたか。自分の体験をしっかりと発表することができたか。
4	先輩を囲む会	OBなど卒業生	卒業生の進路を参考に自らの進路を考える。
4	学科、学部、専門学校調べ		自分の進路にあった学部、学科、専門学校について調べる。
4	人の一生について	保健、家庭科	人の一生について考える。
1	保育園ガイダンス		
8	保育園実習	保育園など	自分たちの子どもの時や今後の姿について考える。
1	老人ホームガイダンス		
8	老人ホーム実習	老人ホームなど	
2	実習の発表		
4	ライフライン		自分の人生設計について考える。他の生徒の人生観について考える。
2	まとめ		今後の自分の生き方について考える。

- [E] ・テーマ 「マーケティング・デザイン」
 ・モデル地域 都内全域
 ・目的 マーケティングやデザインといった学際的な授業を各教科の連携で行う。

時間	内 容	教科間等の連携	留 意 点 及 び 評 価
5	デザインの基礎	商業、美術、書道	マーケティング活動とデザインの機能が身近な生活の中でどのように生かされているかを理解させる ・色彩と構成、レタリング、POP広告
5	マルチメディアの活用	商業、情報、美術、音楽	・動画の利用、音声の利用、情報の統合 静止画像、動画像及び音声に関する情報の特徴について理解させるとともに、各種メディアの情報を統合し活用する方法を学ぶ。
5	情報通信ネットワークの活用	商業、情報	企業広告や商品広告など広報の作品制作方法について実習させるとともに、情報通信ネットワークを利用した情報の活用方法を学ぶ。
7	グラフィックデザイン実習	商業、美術	・グラフィックデザインの機能 ・ポスター、パンフレット、リーフレット ・パッケージデザインへの応用
7	シミュレーション実習	商業、家庭	・ディスプレイの機能 ・店内ディスプレイと商品陳列 ・店舗レイアウトとオフィスレイアウト
6	プレゼンテーション実習	商業、情報	・コミュニケーションの技法 ・口頭、文書による表現 ・プレゼンテーション資料の作成 ・ソフトウェアの利用 ・プレゼンテーション 口頭や文書によるプレゼンテーションの方法及びコンピュータを利用したプレゼンテーションの方法について理解させる。

6 まとめ

学校社会を取り巻く状況が大きく変化する中、都立高校の果たすべき役割はますます重要となっている。そこで本分科会では、幅広い連携をもとに、特色ある都立高校として生まれ変わるための教育課程の工夫について考察した。その中には、都立高校のあるべき姿を地域の中で確立し、開かれた学校づくりのために何をすべきか、という問題も含まれる。

入学者選抜における学区域が撤廃されるなか、都民の学校選択を行う場合の判断基準を提供することが重要である。また、都民の理解・協力があり、学校と都民とが一体となった特色のある都立高校の創造が今後とも必要である。

Ⅳ 学校の特色を効果的に伝える広報活動の工夫

1 はじめに

開かれた学校づくりを進めるなかで、各学校が家庭・地域・社会に向けて、学校の特色を効果的に伝えるために、広報活動のより一層の充実・改善が求められている。東京都立高等学校学区制度検討委員会の答申（『これからの都立高等学校にふさわしい学区制度の改善』）にも、「通年の授業公開の実施、学校案内のパンフレット等の工夫、都立高校合同説明会やインターネット等による情報提供を一層充実させることが重要」とある。

これからの広報活動は、家庭・地域・社会に向けて、積極的に学校の情報を発信するだけでなく、そこからの情報を鋭敏に受信しなければならない。また、受信した情報を、学校の運営に役立てることにより、家庭・地域・社会の要求に応えなければならない。

近年、開かれた学校づくりが進み、各学校では多様な広報活動が行われるようになった。しかし学校の特色をより効果的に伝えるためには、より一層の改善が必要である。

そこで本分科会では、広報活動がどのように効果を発揮したか、在校生や広報担当者に対するアンケート調査から分析した。そして効果的な広報活動を行うための組織づくりの工夫を示すとともに、また、視覚的な手法を取り入れたより効果的な広報活動について検討した。

2 中学生に対する広報活動

(1) アンケート調査の実施

中学生は高校の特色を正しく捉えているか、高校の情報をどのような情報媒体から収集しているかについて、アンケート調査を実施した。また、高校の広報担当者（以下、広報担当者という）に対しては、中学生の情報収集方法を正確に把握しているかについて、アンケート調査を実施した。なお、アンケートは、広報担当者14名、広報担当者の所属校の生徒1,010名を対象に実施した。

【調査項目】

在校生に対してのアンケート

(A) 高校受検のとき、受検校の特色は何であると思ったか。

(B) 高校受検のとき、高校の情報を主に何から得たか。

広報担当者に対してのアンケート

(C) 中学生は学校の特色を正しく捉えているか。〔(A)の集計結果を見て判断する。〕

(D) 中学生は高校の情報を主に何から得ているか。〔(B)の結果を見る前に予測する。〕

(2) 調査結果と考察

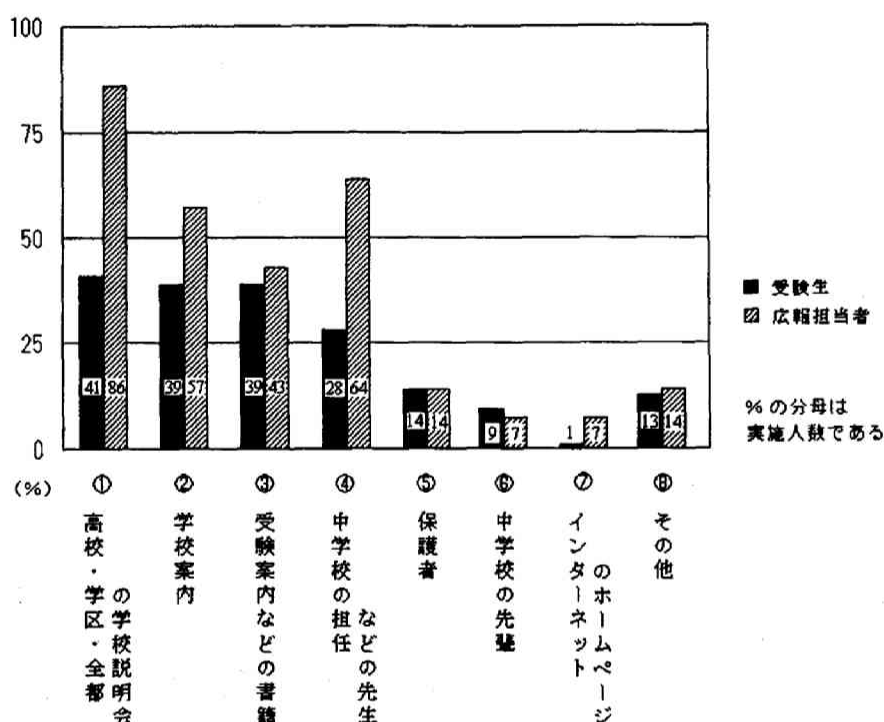
広報担当者の認識：中学生は学校の特色を正しく捉えているか〔調査(C)の結果〕

① よく捉えている 36%	② まあまあ捉えている 50%	③ あまり捉えていない 14%
------------------	--------------------	--------------------

④ 全く捉えていない 0%

この結果から、広報担当者は「中学生は高校の特色を一定程度、正しく捉えている」と考えていることがわかる。また、中学生の情報収集活動は適切に行われているといえる。

中学生は高校の情報を主に何から得ているか〔調査(B)と(D)の結果〕



この結果から、中学生は高校の情報を主に①高校・学区・全都の学校説明会、②学校案内、③受験案内などの書籍から得ていることがわかる。なお、生徒の⑧その他の回答では、兄・姉、塾の先生、学校行事などがあつた。

中学生が選んだ選択肢の合計は184%しかなく、中学生の情報媒体は平均すると2つ以下しかないことになる。また、中学生が選んだ情報媒体で50%以上のものはないことから、中学生は一種類の情報に依存していないといえる。このことから、広報担当者は多種多様な方法で情報を提供する必要があると考えた。

一方、広報担当者は「中学生は高校の情報を何から得ているか」をほぼ予想していると読み取ることができる。しかし、①高校・学区・全都の学校説明会、②学校案内などでは、中学生と広報担当者との数値の相違が大きい。この原因は、広報担当者は直接、自分自身が関わる情報媒体を重視する傾向が強いためであると考えられる。中学生にとって学校説明会や学校案内などからの情報収集は、広報担当者が考えるほど大きなウェイトを占めていないことを、広報担当者は自覚する必要がある。

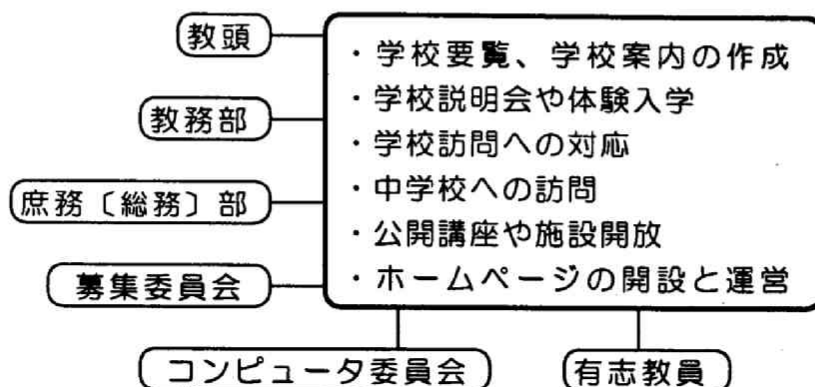
また、受験案内などの書籍は、中学生が選んだ3番目に多い選択肢である。このことから、広報担当者は受験案内などからの取材を重視するとともに、受験案内などにおいて高校の情報が正確に伝えられているかに留意しておく必要がある。

以上の結果から、高校の情報を中学生や家庭、地域社会に対して効果的に伝えるためには、学校案内、高校・学区・全都の学校説明会などをさらに充実させるとともに、中学校の担任などの教員や保護者にも、高校の情報を様々な方法で提供することが重要である。なお、高校の情報を提供する方法は、「4 視覚的な手法を取り入れた広報活動の工夫」で扱った。

3 効果的な広報活動を行うための組織づくりの工夫

(1) 広報活動を担当する組織の現状と問題点

下図は、現状における広報活動と校内組織上の担当を示した例である。



多様な広報活動は、各学校の事情により、いくつかの分掌・委員会に分散されていることが多い。どの分掌にも属さない業務として、教頭が行う場合もある。ホームページの運営などでは、技術的な制約もあり、組織としてよりも、個人の能力に頼る傾向になりがちである。

各学校によって広報活動の担当が分散していることとして、次の理由が考えられる。

- ・広報活動が新しい仕事として従来の業務分担には位置付けにくくなった。
- ・広報活動の多様化により、多くの分野の業務をこなさなければならなくなった。

このような広報活動の現状から、以下の問題点を指摘することができる。

- ・広報活動に一貫性がみられない。
- ・外部から見たときに、どこが広報活動の部署かわかりにくい。
- ・責任の所在が不明確である。
- ・担当者により発信する情報が相違することがある。

(2) 改善の方向としての広報部の設置

そこで広報活動における前述の問題点を解決するために、広報部を設置し、広報活動を独立した分掌として一元的に行うことを考えてみる。

ア 学校組織上の広報部の位置づけ

広報部の位置づけと家庭・地域・社会・学校との関係は次の図のように考えられる。

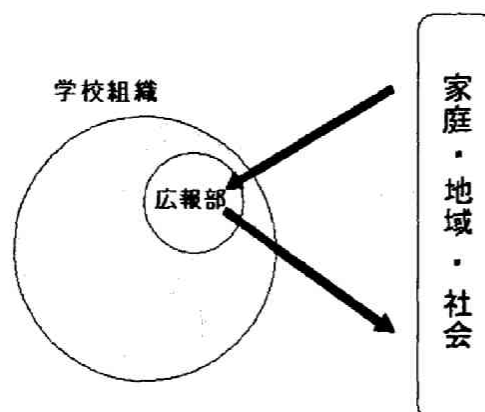
イ 広報部を設けるメリット

(a) 一貫した広報活動

各学校において、校長の経営方針に沿って、一貫した方向性をもつ広報活動を行うことができる。

(b) 外部から見たときのわかりやすさ

広報部を設置することによって、外部から見たときにわかりやすい組織となる。上図からもイメージされるように、家庭・地域・社会からすれば、情報の発信・受信窓口がどこか、明確になる。



(c) 情報の精度の向上

さまざまな分掌・委員会から発信される情報は、さまざまな事情により内容や数値などが異なり、受信者が混乱することがある。情報の発信が広報部に一元化されていれば情報の精度が向上するとともに、誤りや変更のある場合にも対処しやすくなる。

(d) 受信した情報の校内へのフィードバック

家庭・地域・社会から受信した情報を、広報部が集約して、適切に校内に伝えることにより、外部の情報が整理されて校内に伝えられるとともに、学校の特色化のために有用な資料とすることができる。

ウ 広報部を設けることが困難な場合

広報部を設けるメリットが理解されたとしても、多くの学校では現実には、広報部を新設する人的な余裕はないであろう。また、従来まで各分掌が行ってきた広報活動との調整は難しいと思われる。

そこで、広報部を設立できない場合には「総務部（庶務部）や教務部などの広報部門」として独立性を高め、できるだけ広報活動を一元化していくことも考えられる。

また、分掌外に設けられた各種委員会が、その役割に応じて担当する広報活動は、できるだけ縮小し、広報部（または一元化された広報部門）に委ねる必要がある。

このように、開かれた学校づくりを進め、また広報活動の多様化に対応するためにも、従来の考え方や組織にとらわれず、組織と業務の再編成を行う必要があると考えられる。

4 視覚的な手法を取り入れた広報活動の工夫

本分科会では、視覚的な手法を用いて効果的に学校の特色を公開する工夫について研究を行った。学校の特色を積極的に公開することによって、それまでは特色のある学校とはみられていなかった学校も、特色ある学校と認知され、学校自身をより特色化していく可能性をもたらす。平成14年度から、全都立高校でシラバス（授業要項）が公開されるのにあわせ、本研究では授業内容が効果的に伝えられる広報の方法を研究した。また、様々な形態の広報活動に対応できるように、基本となる広報素材（画像等）の共通化を図り、能率的で効果的な広報活動のサンプルを作成した。

前項で示したアンケート調査の結果により、中学生が都立高校を知る情報源として、学校案内のパンフレットや学校説明会の重要性が改めて示された。したがって、これらの機会において各校の特色がより鮮明に伝えられる工夫をしていくことが重要である。パンフレットでは、学校の特色を積極的に打ち出したものを制作すべきである。本分科会においては、動画を使った学校の特色のアピールの仕方について以下に示すこととする。

(1) 学校の特色を映像で公開する工夫

映像によって、学校の特色やシラバスを公開する方法について研究を行い、次のビデオを作成した。近年、ビデオはデジタル化され、会場での上映やインターネット上での公開、またはディスクに収録して配布することも可能になっている。学校の教育

学校説明会ビデオ2



他校では見られない
本校の特色
① 自然の宝庫、山々に近く、しかも交通の便がよい。
② 中学時代に不登校だった生徒の多くが卒業まで登校しています。



黄金色に輝く見事なイチョウ並木

ビデオの中で学校の特色がナレーションとともに紹介される。

1年生の飼育の授業計画
(入試の古文が読めるようになるために)
1学期
4月 古典の飯名づくり
5月 お笑い系説話
6月 俳句のおはなし
7月 しみじみ系エッセー





授業シーンも教員の協力を得て意匠に収録される。教員自身の語りによる授業の特色やシラバスの解説も盛り込む。

生徒による、学校の特色についての発言もビデオの中で紹介される。

授業内容・授業紹介






旋盤を自在に扱えるように丁寧に指導します

電子工作をマスターすれば仕事にも趣味にも応用できます

一人一人のレベルに応じたきめ細かい指導が行われています

最新のCAD設備を備え、設計から製造までトータルに学ぶことができます

活動全般・特色について効率よくまとめた映像資料を用意することにより、さまざまなメリットがもたらされる。例えば、学校説明会における教員の負担を少なくして、説明会の回数を増やすことができたり、説明担当者が毎回変わっても、説明内容に一定程度の均質性をもたせることができる。また、少人数で個別に学校見学に来た人たちに、このようなビデオを見てもらうことで、担当者の負担が減る

とともに、見学者にとっても楽しく学校のことを知ることができるというメリットが

ある。

従来、印刷物を使用して口頭で説明していた教育課程・学校行事・部活動などを、解説ビデオに置き換えることが可能である。さらに授業のシラバスもこのビデオに盛り込むなどの工夫が必要である。説明担当者は必要に応じて口頭で補足することによって効果的な学校説明会にまとめあげることができる。このような解説ビデオをCDやDVDなどの電子媒体に記録して中学校に配布したり、訪問者に持ち帰ってもらうことは、現在ではコスト的にも十分に可能になっている。なお、映像データはインターネット上で公開することも可能であり、それについては次項で詳しく述べる。

(2) 学校の特色をインターネットで公開する工夫

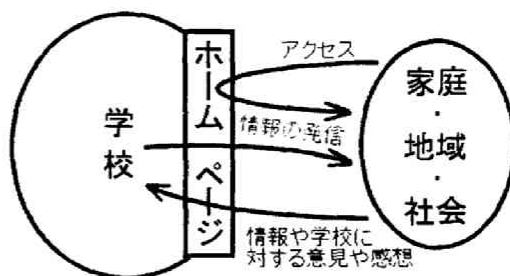
近年のコンピュータの普及に伴い、インターネットを家庭や個人として利用する機会が多くなった。また公的施設においても、ホームページの開設が進んでいる。この状況を受け、東京都教育委員会から学校向けに、ホームページ利用要項や開設へのたし書きが定められ、現時点では、これに則して作成する必要がある。

平成14年度から、中学生により適切な学校選択を実現させるため、入学者選抜における学区が廃止されることとなった。そのため、中学生や保護者が広範囲の高校の情報を得るために、インターネットのホームページの閲覧が多くなると考えられる。これらのことから、各都立高校では学校の情報をインターネット上に公開するために、ホームページの開設やドメインの取得が本格化するとと思われる。

また、平成13年度から、通年の授業公開が実施され、家庭・地域・社会に学校の教育活動が公開されることとなった。こうした状況の中、ホームページ上で授業内容や授業風景や特別活動の状況などを映像（動画）として提供していく意義は大きい。開かれた学校づくりが一層推進されていくこととなる。中学生や在校生にとっても、あらかじめ学習内容を知る機会ができることは、進路選択の情報としても活用できる。

授業風景を公開する研究事例として、平成11年度教育研究員農工部会での具体的な研究がある。そこでは、在校生からは「自分自身の活動を客観的に捕らえることができた。また、次学年以降の学習内容を知り、学習目的を明確にでき、進路決定に役立った。」保護者からは「日ごろの学校訪問では見ることはできない活動を知ることができた。我が子の学習内容を知ることができた。」中学生やその保護者からは「授業風景や在校生の学校行事に取り組む姿勢や雰囲気を感じられ、進路決定に役立つ。」などの研究報告がある。なお、教育活動を公開する上で、生徒のプライバシーの保護を十分に考慮しなければならないのは言うまでもない。

学校教育をより一層充実させるためには、家庭・地域・社会と学校間の双方向の意見交換を行い、時代の変化や地域とともに学校も絶えず変化し続けることが重要である。そのための方法として、学校の情報をホームペー



●ホームページ上での質疑応答例

＜質問＞中学2年生です。中学2年生でも参加できる学校説明会はありますか。

＜回答＞ホームページの「本校のイベント」欄に詳しいことを掲載してあります。

＜質問＞中学3年生の男子です。現在、写真部に所属しています。進学後は、サッカー部か、ほかの運動部に入ろうと思っています。情報をお願いします。

＜回答＞サッカー部は、頑張っています。「部活動」欄に詳しい情報を掲載してあります。

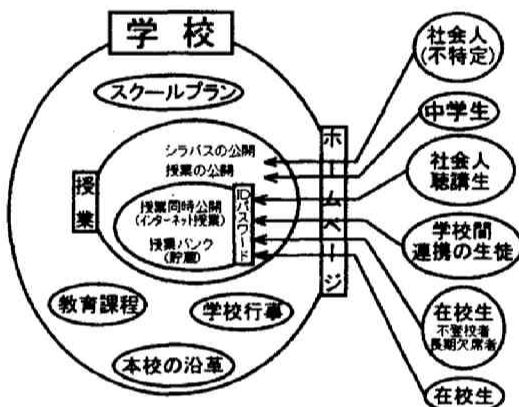
＜質問＞中学3年生の女子ですが、技術を身に付けたいと考えています。工業高校には女子生徒は何人くらいいますか。

＜回答＞多くの工業高校では、1学年に10人以下です。人数は少ないですが、みんな頑張っています。

ジで公開するとともに、閲覧者から公開内容や学校に対する意見を書き込み欄やメッセージ欄や伝言板などを用いて情報を収集することは有効である。収集した情報に対し、学校としての回答や対応についてホームページ上でも答えつつ、学校運営に取り入れることにより、特色ある学校づくりを推進することができる。

多くの学校では、ホームページを活用した広報活動は、これから利用が開始される。このため、校内組織の整備や公開内容の検討、ホームページの維持及び更新の知識の共有化など、ホームページの開設に伴う問題について、各学校で検討・研究・研修を十分に行うことなどが課題となる。こうした課題を解決することにより、開かれた学校づくりを通じて、特色ある学校づくりを推進できる。

将来的なインターネットの利用方法としては、IDパスワードなど特定者アクセス権利の条件整備をすることで、授業公開をより効果的に展開することができる。学校間連携の一つの方法として、2校同時授業（インターネット授業）や授業バンク（年間又は数回の授業をデータとして貯蔵しておく）などによって、在校生には授業の予習・復習として活用し、学力の定着を図る。不登校生徒や長期欠席者には、自宅からでも授業への機会を確保し、学習機会の継続とともに学習への意欲の維持を図る。遠隔地や時間的に忙しい社会人聴講生に対し、自宅から特色ある授業の受講の機会をつくるなど、上の概念図のような多様な利用方法が可能である。



都立

学校

ホームページへようこそ!!

Welcome



正門と奥の教室棟

ご質問、および、学校訪問の対応は
訪問係
まで、ご連絡下さい。

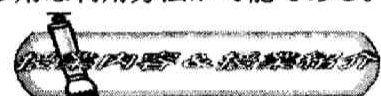
所在地 ◆◆区●●町1-2-1
電話 03-3×××-★★★★
FAX 03-3×××-★★★★

クリック

紹介項目

- 学校の歴史
- 教育課程
- 授業内容、授業紹介
- クラブ紹介、生徒会活動
- 学校からのPR
- 学校行事や入試情報
- 掲示板、意見箱

画像をクリックすると
映像が始まります



1年生 工業基礎



2年生 実習



ホームページ (トップページ)

サブページ (授業内容&授業紹介ページ)

V まとめと今後の課題

都立高校の開かれた学校づくりが進められるなかで、開かれることによって明らかになってくる個性化・特色化をどのように評価し、教育課程に工夫を加え、それを外部に伝えていくかについて検討を加えた。それぞれのまとめと今後の課題については、以下の通りである。

1 学校評価の結果を活かした特色化の方策

学校評価は、単に学校を開くという観点にとどまらず、外部からの声が吹き込まれることにその重要性がある。今回、学校運営連絡協議会の試行校の学校評価においても、学校には、さまざまな改善すべき点があることが明らかになった。しかし、同時に、学校評価は、学校が特色化を推進する場合に大きな手がかりになることが明らかになった。各学校は、試行校が学校評価を受けて取り組んだ実践例等を参考にすることで、外部からの意見を学校運営に確実に反映させ、個性的で特色のある学校づくりを推進することが必要である。今後、各学校が、学校評価の活用方法を研究し、その成果を蓄積することにより、都立高校全体の個性化・特色化が一層推進されることが求められる。

2 特色ある教育課程の工夫

生徒の興味・関心、適性・能力などに配慮した教育課程を編成するとき、必ずしも従前の方法では十分に機能しない局面も考えられる。そのための重要な処方箋の一つが、都立高校の個性化・特色化の推進である。その実現には、学校独自の取り組みが必要であることはいままでのまではない。しかし、その方法には限界がある。より一層の成果を得るためには、地域などを取り込んだ幅広い連携による教育課程の工夫が求められる。今回示したモデルプランは、基本的にこの視点に立つものである。今後このようなモデルプランを実現するためには、校内組織の在り方の工夫や、連携先の開拓および相互理解が必要となってくると思われる。

3 学校の特色を効果的に伝える広報活動の工夫

各学校の特色を効果的に伝えるために、広報活動をより一層充実させる必要性は、中学生や広報担当者へのアンケートからうかがうことができた。開かれた学校づくりが進むなかで、各学校における多様な広報活動をより効果的に進めるためには、今まで以上に学校の広報体制を整備しなければならない。また、近年の情報技術の急速な発展に対応して、視覚的な手法を取り入れた広報活動が求められている。

受信した情報を、どのように学校運営に役立てることができるかは、開かれた学校づくりを進める上で重要なことである。家庭・地域・社会に向けて、より効果的な広報活動を行うためには、各学校の実態に応じた様々な工夫が必要となるであろう。

〔今後の課題〕

開かれた学校づくりを通して特色ある都立高校を目指すために、各校がどのような特色を打ち出していくべきか、今回の研究によって各分科会はその論点の重要性を明らかにしてきた。今後はそれらの個性化・特色化に向けた方策を、有機的に関連させて実施していくことが求められている。都立高校に対する都民の期待は大きく、特色化に向けての改革に遅滞があってはならない。都立高校において、開かれた学校の推進を通して、一層の個性化・特色化を図ることが期待されている。

平成13年度教育研究員研究報告書

〔東京都教育委員会印刷物登録〕
平成13年度 第41号

平成14年1月23日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒1-1-14
電話番号 03-5434-1976

印刷会社名 株式会社 ドゥ・アーバン